
宇宙の騎士-テッカマンオーヴ-

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙の騎士・テツカマンオーヴ

【Nコード】

N6343M

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

満天の星空…とある二人の若い夫婦の元に、遙か宇宙の彼方より流星の如く『星からの贈り物』が飛来した…そして蠢きだした凶暴な怪物達、地球という惑星を舞台に今、一人の『騎士』が覚醒する。

（前書き）

本作は『宇宙の騎士テッカマン』ならびに『宇宙の騎士テッカマンブレード』を参考にした二次創作小説となります

設定を多少テッカマンブレードから流用したり、グダグダな感じもありますので苦手な人は閲覧の際にはご注意ください

・無限に果てしなく広がる大宇宙…。

・それから見れば地球などちっぽけな惑星^{ほし}の一つに過ぎないものだ
った。

「綺麗な夜だ…今日は星がよく見えるな。」

「そうね♪あなた♪」

・二人の若い夫婦…翼沙^{つばさ}鷹夜^{タカヤ}と翼沙^{つばさ}亜輝^{アキ}が自分達の住むマンション
の屋上で夜の星空を天体望遠鏡で眺めていた。

「あ…見て！流れ星よ！」

「お？どれどれ…」

・星々が輝く夜空に一筋の流星が降り注いだ…しかし…。

「…なんか…近づいてないか？こっちに…」

「え。」

・そう…流れ星が段々二人の元に近づいて…。

「わあああああ!?!」

・慌てて逃げ出す鷹夜と亜輝…だが、ド派手な爆発音やクレーターができるなんてことは一切無かった、代わりに淡い光が放たれる『何か』が地面に落ちていた。

「ふえ…ふえええん…うつ…ひつく…ひつく…」

「あ…赤ん坊…なのか?」

・橙色の髪、そして胸元に淡いオレンジの光を放つ小さな球体が埋め込まれてる赤ん坊いのちを見て鷹夜は恐る恐るその子を抱き上げてみるが…。

「びゃあああああ!?!あああああ!?!」

「いいッ!?ちょ…泣くなよ!」

「何やってるのよ!ほら…私に貸して。」

・いきなり泣かれてしまった…鷹夜は困りながら亜輝に赤ん坊を渡す。

「ほらほら…よしよし…」

「ぐす…ぐす…すう…すう…」

・亜輝があやすと赤ん坊はやがて寝ついてきた。

「可愛い♪ねえ見て、この子、男の子みたい♪」

「でもどうするんだ？その子…。」

・亜輝は大層気に入ったらしく、頬擦りまでしてるが鷹夜はいきなり流れ星の様に降ってきた上に胸元に球体を埋め込まてる赤ん坊を少し不審に思い、扱いに悩む。

「私達で育てましょ♪だって私達にはまだ子供いないし…ね？お願い！」

「…ハア…解ったよ…賢悟兄さんや深夜、美由姫達にも相談してからになるけど…。」

「あなた！大く好き！！」

「ドワオ！？いきなり抱き着くな！！」

・結婚してまださほど年月は経たないが子供がまだ出来ぬ翼沙夫妻はこの子供を引き取るにあたって、一緒にマンションに住んでる鷹夜の兄・翼沙賢悟、弟・翼沙深夜と翼沙美由姫にも相談したが…。

・賢悟の場合。

「ぬわあんだとオツ！？お前らついに子供出来たのか！ヤツちゃったのか？ヤツちゃったのかア―ツ！？ぶるあああああ！！…あ？違う？何？拾った？ま…いいんじゃないかい？フグ田く〜ん。」

- 深夜の場合。

「何、悩んでんのさ？兄さんらしくもない…お星様が二人にくれた贈り物だと思えばいいじゃん♪オレ様もついに叔父さんか♪」

- 美由姫の場合。

「ウーン、私まだ若いのに叔母さんか…ちょっと複雑だけど、嬉しいな♪」

- ア。ゴさんの渋いボイス全開な賢悟はさておき、深夜と美由姫は快く許可し、鷹夜と亜輝は赤ん坊を翼沙家の正式な子供として暖かく迎え入れた…。

- そして、10年の月日が流れた…。

- 翼沙家。

「んん…むにやむにや…うるさい!」

- 部屋の一室にて、『ジリリリリ!』と、いうド派手な音が鳴ると共に目覚まし時計が叩き壊され、少年が目覚める。

「ふああああああああ…」

・盛大なあくびをする橙色の髪に寝巻きの胸元から覗く埋め込まれたオレンジの球体を持つ少年…紛れもなくあの時の赤ん坊が成長した姿であつた。

「…ん？」

・少年は携帯電話の時刻を見て化石の如く固まつた…現在の時刻は
AM08:40…。

「…史上最強の遅刻だアアアアアアアア！」

・少年は急いでカバンに教科書やノートを詰め込み、チャチャツと着替えて、朝食を食いに行く。

「おおぅ！？走るな！ぶるあッ！！叔父さんビツクリするじゃねえか、もう！」

「ゴメン！ケンゴ叔父さん！！あとおはよう！」

「はは…まゝた、お寝坊さんか？ボウズ」

「おはよう、シンヤ叔父さん！今急いでるから！！」

「おっはよー」

「おはよう！ミユキ叔母さ…！？」

・走りながら賢悟・深夜・美由姫の順に少年が挨拶するが途中、美

由姫に頭を『ガツ!』と掴まれ、『メキメキ…』音を立てて軋む…。

「ミ・ユ・キ・さん」もしくはミユキお姉ちゃん」でしょう?」

「ミ…ミユキお姉様…お顔が怖いです…。」

((怖ー!!我が妹ながらー!!))

- 美由姫 (今年で年齢2×) の顔は清々しいまでの素敵な笑顔だが『オバさん』呼ばわりされたのに怒りをあらわにしてるためコメカミに青筋を立てながら少年に無理矢理訂正させた…それを見た賢悟と深夜は恐怖に震えた…。

- 食卓。

「ムシヤムシヤ…ガツガツ…ゴクン…ガツガツガ…ムグ!?ゲホゲホ…うおおお!!」

「『『『『慌て過ぎッ!!』』』』」

- 少年は学校にこれ以上遅れたくないため、もうクソミソのメタメタのシツチャカメツチャカに飯を口に頬張るため、彼の父親・鷹夜、母親・アキ、賢悟・深夜・美由姫の五人が盛大にツツコミ入れた。

- そして少年は遅刻^{アウト}近い^{アウト}ため、深夜の車で送ってもらうことにした。

「忘れ物は無いな?」

「ちゃんと寝癖直したわね?」

- 鷹夜と亜輝に見送られ、少年は深夜の車に乗りながら二人に告げた。

「行ってきます！父さん！母さん！」

「行つてらっしゃい、セイヤ聖夜♪」

「深夜！聖夜を頼む！」

「任せな！そら、シートベルトつけな！！飛ばすぜ、ボウズ！！」

- そして車は学校へ行つた…少年・つばさ・セイヤ翼沙聖夜のいつもの慌ただしくも楽しい一日が始まつた…そう…。

- これから自らの『運命』が変わることも知らずに…。

- 聖夜と深夜が学校に向かう同時刻…。

- 都内の名門女子校。

- 色とりどりの女子生徒達が登校していく中、突然…。

「な…何？地鳴り…？」

- 突如、『ゴゴゴ…』と地鳴りが鳴り響き、校内・校外の全生徒が

動揺した時…。

「…『奴ら』は現れた。」

『ウオツホホホホ！！』

『ウツギイイイイ！！』

「キ、キヤアアアア！？」

・突如、地中から昆虫の複眼を顔中だけでなく全身に付けたゴリラや猿に似た奇怪な化け物達が飛び出し、女子生徒に襲い掛かった。

『ウギヤウギヤツ！！』

「嫌ああああ！！」

『ウホホホホ！！ウホ！ウホ！！』

「やだ…やめてえええええ！！」

「痛…ギヤアアアア！！」

「あ…ああ…あああああ！！」

・化け物達のは弱い女子生徒達を容赦無く捕まえ、玩具を乱暴に扱って遊ぶ子供の様に彼女達を振り回して地面に叩きつけたり、手足や首をもぎ取った…。

『ウギヤギヤツ！！！！』

「た…助け…ひiiiiiii!!」

-さらには己の欲を満たすために、邪魔な制服を引き千切り、彼女達を犯し尽くした挙げ句、腹を裂いて内臓を貪りはじめた…。

-教師含む、全校生徒を集団暴行・殺人という最低最悪な狂行をやつてのけ、女子校全体を血の赤で染めた化け物共は満足した様に地中へと帰っていった…。

-さらに同時刻…老人ホーム。

-いきなり空から蜂の巣の様な形をした隕石が落下し、中から蜂を無理矢理人間にした様な異形の生命体がウジャウジャ出て来た。

「ひえええ…ナンマンドブ、ナンマンドブ…ぶぎえッ!？」

『ブブブブブ…!!』

-蜂人間共は羽根で空を飛び交いながら、尻から生やした針を逃げ足が遅い老人やヘルパー達の頭に突き刺し、肉体をドロドロに溶かして丸め、肉団子にして巣の中に詰め込む…どうやらコレが食糧らしい、しかも肉団子を作るだけではない…。

「うぐ…ぐがが…!!」

『ブブブブブブブブ…!!』

-蜂人間達は老人達の頭に卵まで植えつけた…いずれ卵がかえったら脳を食い尽くし、幼虫が外へと這い出るだろう…。

- 彼らは『地球の存在』では断じてない…『宇宙』からやって来た未知の『来訪者』達は好き勝手に暴れ、蹂躪する…しかし、彼らの問題を取り上げ、対策を練る一大組織があった。

- 対地球外生命体対策防衛組織『スペースナイツ』・日本支部。

「奴らめ…勝手なことを…許さん…許さんぞオオオオオオオオオオ!!」

「賢悟兄さん! 落ち着いて!!」

- 実はこの組織のトップや各部隊の中心人物達は翼沙家の人々だった、最高責任者にして長官である賢悟は思い切りア。ゴさんボイスで悔しがっていた。

「今までは数が少なかったからなんとかオレ達の手で凌いできたが…近頃は集団で現れる…『来訪者』^{ストレンジャー}め…人間をなんだと思ってる!」

- 『来訪者』^{ストレンジャー}、それが奴ら…地球外生命体^{エイリアン}全てに付けられた総称^{コードネーム}であつた。

「聖夜は大丈夫かしら…?」

「今は深夜兄さんがいるから大丈夫よ…アキさん。」

- 亜輝は心配するが美由姫が落ち着かせた。

（頼むから何も起こってくれるなよ…聖夜の身に何か起きたら許さんぞ…！）

- 鷹夜はあの日…聖夜に初めて出会った日を思い出し、亜輝や兄弟達と何が起ころうと必ず守り通すと決めたのだ。

「これは…！！大変です！またもストレンジャーが…場所は…都立剣木^{さき}小学校…！」

「「「「！？」」「」」」

- しかし、鷹夜の願いは残酷なまでに裏切られた。

- 都立剣木小学校。

「わあああああ！？」

「キャアアアア…！」

『グジュル…グジュル…。』

- 小学校では腹にデカイ口がバツクリと開かれ、長い舌を持つ、全身緑色で顔がのっぺらぼうな異形のクリーチャーとしか言いようの

無いストレンジャー達が子供を捕食していた。

「クソ…なんてこった！オレ様はただ甥っ子を学校に送り届けたいだけなのによ！！」

『グギエ！？』

・深夜はつくづく自分が聖夜を車で送って正解だと内心想いながら…隠し持ってた光線銃^{ビームガン}でストレンジャー達を射殺しまくった。

「いいかボウズ！車にいろ！そして死にたくなきゃ絶対出んじやねーぞ？返事はッ！？」

「う…うん！！」

「よろしい！うらああああ！！」

『ギョヘエエエエエ！！』

・深夜は聖夜を車に引つ込め、出来るだけ自分の手で応戦していたが多勢に無勢…相手が多過ぎた。

「チイツ！！こりやダメだ！！逃げるが勝ち…うおッ！？」

・深夜は諦め、逃げることを選んだが、ストレンジャーの内の一体が腕を伸ばして攻撃、彼の肩を掠めた。

「叔父さん！！」

「掠り傷だ…騒ぐなって…。」

「テック…セツタアアアアアアア！」

・次の瞬間…球体から放たれた眩い橙色の光が聖夜の全身を伝い、覆う様に包み込んだ。

・白とオレンジを基調とし、埋め込まれた輝く球体『テックオーブ』が胸の中心で露出した機械的な装甲と騎士を思わせるフォルム、顔全体を覆う仮面とも鉄兜とも取れる顔、さらには身長も子供のものから2メートル弱はある倍のものと化し、聖夜は今の『騎士の姿』なまえとしての自分の真名を声高らかに告げた。

『テッカマン…オオオオオオオオウッ！！』

『ギギ…！？』

『グジュ…！？』

「テッカ…マン…？」

・ストレンジャー達は聖夜…否、騎士『テッカマンオーブ』に警戒心を強め、深夜は突然変身してしまった甥っ子の姿を見て啞然としていた。

『来い…怪物共！』

『『ギギイイイイイイ！！』』』

・オーブはストレンジャー達の群れの中に飛び込み、ストレンジャー達もまた彼に一齐に襲いかかる。

『テック…ランサアアアアッ！！オオオオオオオ！！』

『ウギヤアアア！？』

『ギヒイイイイ！！』

・オーヴは両手の手甲から槍とも剣ともとれる武器『テックランサー』を出して、その場でコマの様に高速回転しながらストレンジャー達を次々に斬り刻み、肉片や不気味な色の血を飛散させながら次々と奴らは絶命していった。

『ギギエツ！！』

『ギヒギヒ…ギヒヒヒッ！！』

『！？』

・左右からストレンジャー達が長い舌を伸ばし、オーヴの両腕を絡み取り、拘束する…しかし。

『テックランサー…ショットオツ！！』

『ギブ！？』

『グジャ！！』

・いきなりテックランサーの刃が射出され、刃がストレンジャーの身体を貫通、オーヴは拘束から逃れた後、再びテックランサーを出して手当たり次第に周囲のストレンジャー共を八つ裂きにしていき、緑ののつぺらぼう達を全滅させるが…。

『ウホオオオオオ!!』

『ブブブブブ…!!』

「ンな…!? 違う奴らまで出て来やがった!! やべえ… 数が半端じやねえぞ!!」

・女子高を襲ったゴリラや猿型、老人ホームを襲った蜂人間型のストレンジャー達が入れ替わりに現れ、オーヴは再び大量の敵に囲まれてしまう。

『ブブ…マサカ、「宇宙ノ騎士・テッカマン」ガ、コンナ辺境ノ惑^ホ星^シニ居ルトハナ!!』

『ウツホオオオオオ… テッカマン!! 殺ス!!』

・どうやら蜂人間やゴリラ共はテッカマンを知ってるらしく、目の前にいるオーヴを『敵』として認識、殺意を集中させたと同時に一気に飛び掛かる。

『『死ネエエエエエエツ!! テッカマアアアアンツ!!』』

「…聖夜アアツ!!」

・いくつもの死の気配が自分に向かってるにも関わらず、オーヴは至って冷静に状況を見据え、突如、自分の装甲を細身な^{スリム}フォルムに変形させる。

『クラッシュ… イントルードオオオオオオ!!』

『ガギヤアアアアア！？』

・ 背中のバクパクからバーニアを吹かせながら超高速を生かした突貫攻撃『クラッシュイントールド』で次々ストレンジヤー達を貫き、血飛沫を撒き散らしながらオーヴは天空を舞い、胸部装甲を開いてエネルギーを補充し、テッカマンオーヴ：最強の『必殺技』を放った。

『ボルテツカアアアアアアアアアッ！！』

『ギ…！！？』

『助ケ…！！！』

・ 殲滅の光波動『ボルテツカ』が放たれた瞬間、ストレンジヤー達は悲鳴を上げる間もなくボルテツカに包まれ消滅してしまった…。

（…なんてこつたい… 光線銃一丁で戦ってたオレ様がバカみたいだぜ。）

・ 深夜は地面に大の字に倒れ、視線をオーヴに向けた時。

「深夜アッ！！」

「深夜兄さん！」

「深夜さん！？」

「鷹夜兄さん、美由姫、亜輝さん…もうちょい早く来て欲しかった

なゝゲホ…ゴホ…」

・武装したスペースナイツの部隊を引き連れた鷹夜達が重傷を負った深夜の無残な姿を見て駆け寄るが…。

『…。』

「なんだ…お前は…？」

「新しいタイプのストレンジャー？」

「違うつて…ソイツ、『聖夜』だぜ？ちなみにストレンジャー共は皆、片づけてオレ様を助けたのさ」

「『え、えええええ！？』『…』」

・鷹夜達はオーヴの姿を見て警戒するが、深夜の説明を聞いた途端びつくりした。

「キュウ…。」

『か…母さん！？』

・変わり果てた息子の姿を見て亜輝は失神…変身を解いた聖夜が彼女の元に駆け寄った。

「なあ、兄さん…。」

「深夜？」

「ひよつとしたら聖夜はさ…単にお星様からの贈り物じゃなくて、
地球人の『救世主』だったりしてな…。」

「翼沙聖夜…またの名を『宇宙の騎士テッカマンオーヴ』、彼は果たして深夜が言うようなストレンジャー達から人類を守るための『救世主』なのか？」

「それとも破滅を呼ぶ『悪魔』なのか？」

「彼の廻り始めた運命の輪が紡ぐ物語はまだ序章に過ぎない…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6343m/>

宇宙の騎士-テッカマンオーヴ-

2010年10月10日15時22分発行